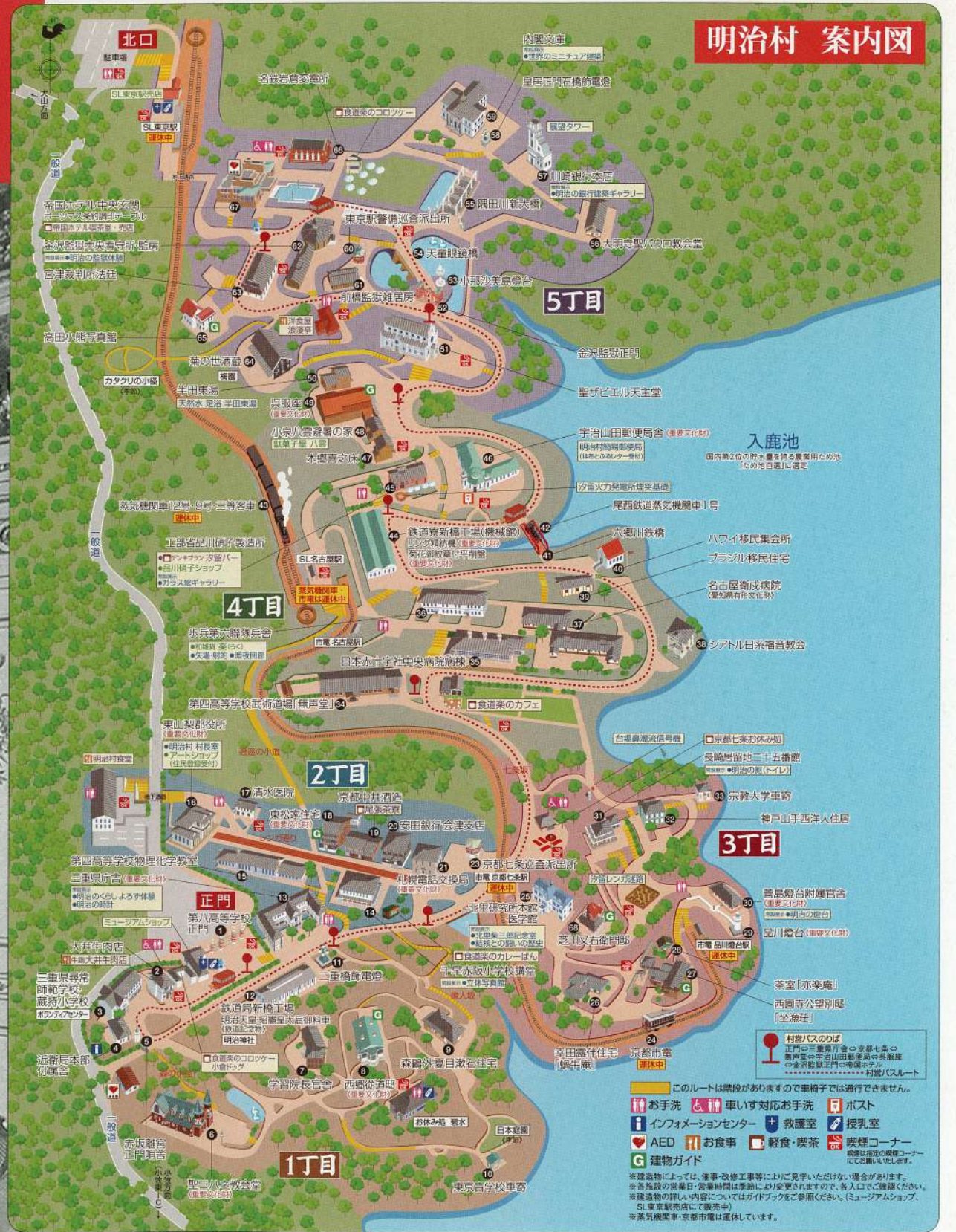


MEIJI MURA

明治村だより Vol.62
2010 Winter



北里研究所本館・医学館 保存修理工事……2
日本とドイツの学术交流 ヴォンデ、ペアーテ……4
近代日本の西洋医学導入のあゆみ……6
冬の催しもの……7



平成 22 年 12 月 15 日発行
「明治村だより」第 62 号 (平成 22 年 冬)

発行 博物館明治村
〒484-0000 愛知県大山市内山一番地
電話 (0568) 67-0314
<http://www.meijimura.com>

製作 大日本印刷株式会社

●表紙写真
「東宮御所写真帖」より「紅之間」と、
大肘掛椅子

◆お知らせ◆
12月20日より
蒸気機関車、京都市電は運休

「明治村だより」第 63 号発行のお知らせ
発行時期 平成 23 年 3 月中旬 (予定)
申込方法 「明治村だより」第 63 号ご希望の旨及び
ご住所・お名前を明記の上、送料 140 円切
手とともに封書にてお申し込み下さい。

2010年 12月						
日	月	火	水	木	金	土
			1	2	3	4
5	6	7	8	9	10	11
12	13	14	15	16	17	18
19	20	21	22	23	24	25
26	27	28	29	30	31	

2011年 1月						
日	月	火	水	木	金	土
						1
2	3	4	5	6	7	8
9	10	11	12	13	14	15
16	17	18	19	20	21	22
23	24	25	26	27	28	29
30	31					

カレンダーの ■ が休村日です

北里研究所本館・医学館 保存修理工事



写真1 修理前全景（南西より見る）



写真2 修理前車寄せ柱及び梁の腐朽

平成二十一年（二〇〇九）十一月一日から平成二十二年（二〇一〇）十月十五日まで、北里研究所本館・医学館の保存修理工事が行われました。この建物は今年で移築三十周年を迎えますが、大掛かりな修理工事は初めてとなります。また、今回の修理工事は、学校法人北里研究所より多大な御寄付をいただくことにより実現できたものです。以下に、その概要を写真とともに解説いたします。

修理前の建物は、屋根材である天然スレート脱落や、車寄せ部分、建物外壁をはじめとする木部の腐朽劣化、軒樋は全周に亘り穴があき、室内に雨漏りがみられるなど様々な被害がありました。また、建物の外観は、塗装が剥れたみすばらしい姿となっており、我々も心苦しく感じておりました（写真1、2）。

修理工事内容は建物外部では、屋根天然スレートの全面葺替、これに伴う野地板の取替、軒樋の全面取替、外壁など木部腐朽箇所の修理、左官壁の修理、建具の修理、塗装の塗替などがあげられます。また、建物内部は、一階及び二階とも主要室、廊下部分について床組の補強や床板の張替の他、建具の調整、壁面や天井面の塗装の塗替を行いました。

修理工事が進むと、予想以上に建物の破損、劣化している箇所が多く、その度合いも激しいことがわかりました。中でも、本建物の象徴ともいえる塔屋部分は、銅板部分だけでなく、ほとんどすべての部材を取り替えるなくてはならない状態でした。高所であり、複雑な形状であることから、大工、板金ともに最も苦勞をかけた部分です（写真3、4）。



写真4 塔屋銅板葺替終了



写真3 塔屋解体腐朽状況の確認

一方、今回の修理工事を通して色々な発見もありました。例えば、塗膜調査を行ったところ、内外の建具周りや付柱の塗装については、創建当時の旧塗膜が残っており、この色を再現することができました（写真5）。残念ながら外壁下見板部分は、古い塗膜が残っており、修理前の色に戻しましたが、少

しでも創建当時の色調に近づけることで、当時の建物の風格を味わうことができるかと思えます（写真6）。

また、建物内部の中央の大階段、東側の階段、二階北東端の部屋に残された実験台は、修理前の暗色の塗装を剥すと、美しい柾目が現れ、高級な木材が使用されていることがわかりました。とりわけ実験台には焦げ跡や、容器の跡が確認でき、長らく実験で使用された痕跡が残っていることもわかりました（写真7）。いずれも、当初は美しい柾目を活かす仕上げが施されていたと思われ、階段部分はコーパルワニス塗、実験台部分はカシュー漆拭塗にて仕上げを施しました。ぜひ、素材そのものが持つ美しさを御覧になっていただきたいと思えます（写真8、9）。

修理工事には、実に多くの人間が関わります。大工から左官、屋根、板金、塗装、建具など専門家である職人、これらの職人をまとめる人、また工事そのものを計画する人等、長らく存続している建物は、

これらの人々の成果ともいえるでしょう。今回の修理工事も、そのような成果の一端となることができれば真に幸いです（写真10）。



写真8 二階実験室全景

写真7 窓側備え付き実験台の痕跡確認



写真5 塗膜調査



写真6 外部建具周り塗装上塗り



写真10 竣工後南面全景



写真9 中央階段

日本とドイツの学術交流

ヴォンデ、ペアーテ

二〇一一年一月で、日普修好通商条約が締結されて一五〇年経ちます^{※1}。二〇一〇年秋から二〇一一年にかけて、ドイツでは、在ドイツ日本大使館、そして日本では、在日本ドイツ大使館の後援の下に、日独両国の各地で様々な催しが予定されています。そこでこの『明治村だより』で、ドイツ・ベルリンから見た、明治時代の日独（日普）関係を振り返り紹介したいと思います。

二〇一〇年はベルリンにいる私たちにとって、記念すべき特別な年でした。ベルリン大学（現フンボルト大学）が創立二〇〇周年、そして、シャリテ（現フンボルト大学付属病院で、ヨーロッパの規模を誇る医学研究養成機関 写真1）が創立三〇〇周年を迎えました。ベルリン大学は明治時代の日本のエリート官僚の、そしてシャリテは日本の近代医学の揺籃の地であったことをご存知でしたでしょうか。



写真1 シャリテ（現フンボルト大学附属病院）

明治初期、日本政府は数多くの若者を



写真2 ルドルフ・ハルトマン博士著『ドイツの日本人学生 1868-1914』

ヨーロッパに送り出します。彼らのほとんどは、「お雇い外国人」教師の下で、大学教育を終えた研究者たちでした。当初の留学先は、フランス・イギリスでしたが、一八七〇―七一年の普仏戦争でドイツが勝利を得た後、日本人の留学先のトップは次第にドイツへと移っていきました。一九〇〇年以前の日本人の留学先の六七割、二十世紀初頭には四分の三もの日本人留学生在ドイツで学びました。

私の大学の同僚であるルドルフ・ハルトマン博士は、彼の著書『ドイツの日本人学生 一八六八―一九一四』(Japanese Studenten an deutschen Universitäten und Hochschulen 1868-1914 写真2)でドイツの大学等に正式に登録した七四七名の日本人留学生と、『ドイツの日本人留学生辞典 in Deutschland 1868-1914』^{※2}で森林太郎（鶴外）や北里柴三郎などのように私的に教授の了解を得た研究者や聴講生も含んだ二、六九四名を扱っています。そして一八七四―一九一六年の間に、計四〇五名の日本人がドイツで博士論文を提出し、内訳は医学が三二五人と圧倒的多数を占め、それに続いて文学・語学が四七人、法学が二二人となっています。千名を超える学生の興味は主に医学に向けられ、四割近くが医学部に所属していました。日独間の

交流において、医学は最初から先駆的な役割を果たしていたのです。医学の専攻分野については、記録にのこっている学籍簿によると以下の通りです。

内科／一二五人、外科／九三人、眼科／六二人、婦人科／四九人、病理学／三五人、

皮膚病／三二人、細菌学／三一人、解剖学／二九人、衛生学／二六人、

薬学／二七人、耳鼻科／二四人、小児科／二二人、生理学／一九人、

神経医学／八人、泌尿器科／七人、小児治療学／四人、歯科／五人、精神科／三人、

胃腸科／二人、児童学／二人、胎生学／一人

初めて正式にドイツで学籍登録した日本人は、一八六八年の冬学期からハイデルベルク大学で医学を専攻した馬島（後の小松）清治でした。彼が登録する二年前の一八六六年に、赤星研造がドイツに到着しているのですが、入国後しばらくはドイツ語習得に専念していたため、ハイデルベルク大学医学部への入学は一八七〇年です。両者とも武家出身で、それぞれの藩からドイツへ派遣されました。

ベルリン大学に日本からの留学生在が集中したのは一八六八年から一九一六年の間で、七四七人の学生が学籍登録し、学問を修め、帰国後には重要なポストに就いて、日本の近代化を推し進めました。

シャリテでは一九一四年までに三〇八人が学び、学籍簿は医学分野の「Who is who in Japan」として読むことができます。有名な人物を挙げると、緒方正規、日本で細菌学の基礎を築いた北里柴三郎、癌研究者の山極勝三郎、ドイツに倣って日本最初の法医学研究所を創立した片山国嘉、ならびに病理学研究所の創立者である三浦守治（ウイルヒョウに師事）などがいます（写真3）。呉秀三は日本における精神医学の先駆者となり、三田定則は血清学、長井

は、当時のやり方に倣ってヒポクラテスの誓詞^{※3}を行いました。彼は、キリスト教徒の医師が通常行うsanctum evangelium（聖福音書）の誓いは、寛容なプロイセンの時代が幸いして省かれました。彼は当時ドイツ国内で、二十五人の有能な医師のひとりに数えられました。

佐藤がドイツで初の東洋人の博士であるとすれば、北里柴三郎（写真6）はプロイセンで初の外国人教授でした。彼は、一八八四―九一年までロバート・コッホが所長として勤務した衛生学研究所で、研究に明け暮れ、一八八九年、世界で初の破傷風純粋培養法に成功し、翌年、エミール・フォン・ペーリングと共に血清療法を開発しました。北里のドイツ留学はもともと三年、長くて四年、それも後半の二年はミュンヘンで学ぶよう石黒忠恵^{（たけの）}から申し渡されましたが、北里は納得しません。その場に居合わせた森嶋外は、北里の理由に納得し、上司石黒忠恵へ口添えします。一方、コッホのほうでも、北里のベルリン滞在延長許可がとりやすいように、当時衛生研究所の正式職員になっていた北里が、ベルリンでこのまま研究を続けるなら、帰国の際に教授に任命するという約束をします。（一八九二年五月一日にプロイセン王国は、アメリカ経由で帰国途上の北里に「Professor」の称号を授与しました。）

北里柴三郎について興味をお持ちの方は、一九一五年に建設された北里研究所を緻密に復原した明治村を是非訪れてみてください。二〇一〇年三月に明治村を訪れた私は、その

長義は薬学の基礎を築くことに貢献しました。ベルリンにおける東洋人留学生の草分けとなったのは、一八六八年、医学を修めるためにベルリンにやって来た青木周蔵^{（あおき）}と萩原三圭^{（あぎ）}でした。彼らは旧幕府時代に派遣されましたが、ベルリン大学に正式に学籍登録したのは一八七〇年のことです。

彼らに続く人物には、佐藤進（写真4）^{（さとう）}がいます。後の順天堂医院の院長です。彼は、明治政府が発行した海外渡航免状第一号を得ただけでなく、一八七四年八月一日、三三二ページの論文「児童の

下痢について」^{（写真5）}をドイツ語で書き上げ、日本人としてだけでなく、アジア

